

「ここで戦争があつたんだ。私も家老の妻として、なぎなたをとつて戦かおうとしたんだ。頼みにしていた鶴ヶ城、あの天守閣も、もうみあたらない。」
夫の季昌も、同じ思いなのか、しばらく立ちすくんでいます。雲がゆつくりと、南から北へ流れていきます。

「北のはずれ、斗南での生活は苦しかった。みじめだった。このふるさとは、あの戦いで傷つけられた。そこに、私は帰ってきた。私は、このふるさどにつくさねばならない。教育によって、しっかりした人物を育てなければならぬ。なかでも幼児教育と女子教育、三つ児の魂百までとよくいうが、大切なのは人間の基礎の教育だ。そして、その母をつくる女子教育——私は、それをなしとげることによつて、このなつかしいふるさどにつくすのだ。」
なつかしきとともに、リンの固い信念が心の中にだんだんと強まってくるのでした。『人間は六歳までに性格が形づくられる』という幼児教育への思いが、